

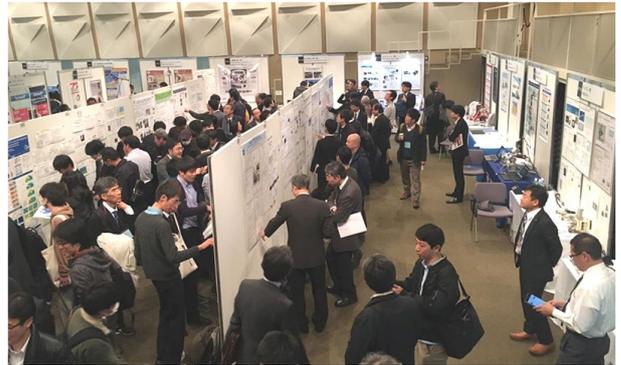


本会記事

■ 第36回プラズマ・核融合学会年会報告

現地実行委員会委員長 武藤 敬 (中部大学)

第36回年会在2019年11月29日から12月2日の日程で、中部大学春日井キャンパスにて開催されました。中部大学での開催は、1994年以来、26年ぶりです。中部大学は名古屋駅から土岐の核融合科学研究所へ行くJR中央線の窓から左手の丘陵地の上に見える総合大学で、JR神領駅から大学専用バスで約10分のアクセスです。今回の年会も秋学期の授業期間中に開催することによって講演会場の確保に苦労しました。多くの調整を重ねた結果、土日を挟んで金曜から月曜日に開催することとなりました。大学の教員にとっては講義の制約が無い休日を含むことで出席が容易になった反面、企業展示などの関係者にとっては不自由が増したかもしれません。それでも終日通して講義の入っていない会場は学内に散在しており、年会会場を集約できませんでした。特に初日は会場間の移動にとっても苦労していただくことになりましたが、散歩の途中に自慢の美しい構内を見ていただけたのは幸いでした。総合受付とポスター発表は入口近くの三浦幸平メモリアルホールにて行い、主となる大きな講演会は学内中央部の不言実行館アクティブホールにて行いました。それぞれ、本学園創始者の三浦幸平先生とその建学の理念である「不言実行、あてになる人間の育成」の言葉から命名した会場です。他にリサーチセンター、工学部ファカルティールーム、宇宙航空理工学科実験棟講義室及び22号館が講演会場として日替わりで使われました。開催4日間の内、3日目の日曜日はJR神領駅からのバス便や食堂営業は通常無いのですが、今回は学会の為



に特別に運行と営業をしていただきました。開催に当たっては現地実行委員会を組織し、大学本部と工学部事務の皆さんにも参加していただきました。

期間中の参加者は、641名（正会員321名、学生会員229名、会員外25名、学生非会員6名、シニア会員29名、招待者24名、その他7名）でした。講演件数は、一般講演482件（口頭発表117件、ポスター発表365件（ポストデッドライン講演含む）、シンポジウム8件、招待講演29件、特別講演1件）でした。またインフォーマル会合4件、ランチョンミーティング1件も行われました。最新のITER-BA, LHD, 高強度レーザー関連等の核融合関連研究、基礎プラズマ、プラズマプロセス、プラズマ壁相互作用、数値シミュレーション研究等の発表に加えて、これまで本学会に参加することの殆ど無かった他学会グループとの連携セッションも幾つか企画されました。実験室と天文プラズマ、プラズマとタンパク質化学、プラズマと生体などが注目されました。また新しいアイデアとして飛翔型ミュオン触媒核融合炉のアイデアも発表され注目されました。

ポスター発表と企業展示ブースは同じ会場の中に混在して配置され、多くの参加者が訪問し盛況に実施されました。これらの会場隣の総合受付の部屋にはコーヒーなどのドリンクサービスとテーブル・椅子が置かれ、休憩と議論の場として学会の期間中は多くの研究者や参加者の交流の場として賑わいました。

学会員の親睦の場として活用されている懇親会は、2日目の夕刻に名古屋市内のサッポロビール名古屋ビール園浩養園にて行われました。若手、学生の参加も含めて197名が参加し、地ビール飲み放題と、焼肉の食べ放題の企画にとっても盛り上がり、楽しい時間を過ごしました。





この期間中には2回目となるプラズマリーグサッカー大会も企画され、スポンサーも付いて開催されました。

本年会の開催にあたっては多くの皆様からご支援とご協力をいただきました。中部大学の飯吉厚夫総長・理事長、石原修学長（現地実行委員会会長）には終始ご支援とご助力をいただきました。学会の森雅博会長や岸本泰明年会運営委員長をはじめ、学会理事会や事務局の皆様には円滑な年会運営とプログラム編成に大変ご尽力いただきましたことを心より感謝申し上げます。

最後に現地実行委員会の皆様の名前を記し、その献身的な活動に心より御礼申し上げます。桑原大介（総務全般、殆どの業務の中心となっていました）、保黒政大、服部公央亮、神田昌枝（以上、工学部宇宙航空理工学科）、中村圭二（現地実行委員会副委員長）、小川大輔（以上、電気電子システム工学科）、鈴木肇、須藤滋（以上、共通教育科）、廣岡慶彦、山本則正（以上、創造理工学実験教育科）、井上徳之（超伝導・持続可能エネルギー研究センター）、鶴見直城（工学部事務）。

■各領域からの報告

基礎領域

領域長 荒巻光利（日本大学）

一般講演と5件の招待講演に加え、シンポジウム「飛翔型（散逸系）ミュオン触媒核融合（IFMCF）炉の新展開」、オーガナイズドセッション「実験室プラズマ・天文プラズマ連携セッションー加熱・輸送・乱流現象を中心に」および「データ駆動プラズマ科学ーインフォマティクスで発見を加速するー」を開催した。

年会初日に開催された、オーガナイズドセッション「実験室プラズマ・天文プラズマ連携セッションー加熱・輸送・乱流現象を中心に」では、2件の招待講演を軸とした3つのセッションが生まれ、会場いっぱい聴衆が集まった。ひのひを中心とした太陽観測による乱流に関して、磁場のヘリシティ、黒点のダイナミクス、乱流速度場評価等に関する研究が紹介された。一方、実験室側からは、トラスプラズマ、レーザー生成プラズマを用いた波動・乱流励起、衝撃波による粒子加速、また液晶電気対流を用いた乱流境界の輸送現象に関する実験、理論解析が報告された。境界条件の違いやモデルの共通性などが議論された。セッションの最後に、太陽の地上観測と衛星観測の研究計画が紹介され、今後の研究の方向性が議論された。

年会2日目に開催されたシンポジウム「飛翔型（散逸系）ミュオン触媒核融合（IFMCF）炉の新展開」では、原子が飛び交う状態で起きる「飛翔型ミュオン核融合」という新しい学理に基づく核融合について報告された。ミュオンが電子と置き換わったミュオン原子は、静電遮蔽効果によって、通常の原子に比べて原子核間距離が1/207まで他の原子に近づくことができる。これにより、相対運動のエネルギーが1-2 keVで、核融合反応断面積

が2000 barnに達する。この現象に関する素過程等、物理学及び工学に関する課題が設定され、研究の進捗に関する報告があった。

年会3日目には、オーガナイズドセッション「データ駆動プラズマ科学ーインフォマティクスで発見を加速するー」が開催された。近年、プラズマ・核融合分野において、データを学習させ未知の例について判断するアルゴリズムを発展させる、あるいは多くのデータからその母集団の持つ特徴をモデリングする、という試みが多く報告されるようになってきた。そこで、そのようなデータ駆動プラズマ科学と呼べる新たな研究潮流に関わる研究者が一堂に会する場として本セッションが企画された。本セッションでは「動的モード分解の最近の発展と応用の広がり」と題した招待講演を皮切りに、動的モード分解に関連した発表が多くあった。動的モード分解では時間と空間を離散化し、物理量（観測量）を離散時空間に対応した行列として表し、ある時刻の行列が次の時刻にどのような行列に移るのかをデータから推定するのに用いられる手法である。この手法を乱流解析に用いた例が報告され、手法の特性や有効性等が議論された。本セッションではプラズマ・核融合学会外からの発表もあり、プラズマ・核融合研究コミュニティが持つ大量のデータは異分野融合の架け橋となる事が期待できると感じた。

また、基礎領域の発表から、若手学会発表賞の正会員部門で1名、学生部門で2名が受賞した。

プラズマ応用領域

領域長 豊田浩孝（名古屋大学）

一般講演の他、オーガナイズドセッション「プラズマプロセスの高精度制御」「プラズマと生体の相互作用」を実施した。さらに、2件のシンポジウム「プラズマに

よる生体荷電制御科学の夜明け」,「プラズマ理工学-タンパク質化学による未踏領域の開拓と基盤確立をめざして」を開催した。以下にオーガナイズドセッションおよび2つのシンポジウムの概要を報告する。

オーガナイズドセッション「プラズマプロセスの高精度制御」では産学官から3件の講演があった。産からは“先端微細加工におけるプラズマエッチング技術の動向と今後の展望”と題して東京エレクトロン宮城の本田氏から高精度な微細加工を実現するための Atomic Layer Etching や Atomic Layer Deposition 技術の紹介とその表面反応過程の理解の重要性が示された。官からは“マイクロ波励起吹き出しプラズマによる高品質グラフェンの低温合成”と題して産総研の榊田氏より世界初となる400°Cという低温でのグラフェン形成技術が紹介された。生成機構においてはまだ分からない事が多々あるが、アプリケーションの点からは非常に興味深い内容である。学からは“反応性プラズマにおけるナノ粒子生成制御”と題して九州大学の鎌滝氏よりシリコン窒化膜の CVD における膜質と生成微粒子との関係が示され、新しいプロセス制御の手法が提案された。オーガナイズドセッション「プラズマと生体の相互作用」は、プラズマと医療・農業・生命科学などこれまで接点がなかった分野横断研究を活性化する目的で開催された。本セッションでは、2件の招待講演と2件の口頭講演が行われた。1件目の招待講演では自然科学研究機構の井本敬二氏より「融合科学としてのプラズマバイオ」を講演いただいた。ここでは生命科学の現状を懇切丁寧に解説していただくとともに、活性分子によるストレス効果の観点からプラズマのバイオテクノロジーへの応用についての期待を説明いただいた。2件目の招待講演では、熊本大学の勝木淳氏より「強電界パルスの生体作用と医療・食品プロセスへの革新応用」について、パルスパワーの医療・食品応用の現状について講演いただいた。質疑応答も盛んにおこなわれ、プラズマのバイオ応用展開のさらなる発展を期待されるものであった。

シンポジウム2件はともに現在学会の専門委員会で活動されているグループからの提案である。最近の研究から、生体物質とプラズマ(荷電等)を相互作用させることで、生体物質の形態を可変できることがわかってきた。そこで、生体に備わる荷電の意味を理解していくために、荷電等を作用点とした生体への効果について、物理的・化学的・生物学的・医学的視点で理解を深化させることを目的として2019年4月に専門委員会「プラズマによる生体電荷制御の科学」が立ち上がっており、当専門委員会が母体となり、シンポジウムS2「プラズマによる生体荷電制御科学の夜明け」を開催した。講演では、千葉大大学院の池原氏から「プラズマによる帯電調整による血清タンパク質の分散安定性制御」、東大大学院の山本氏から「糖鎖機能を標的とする創薬デザイン」、産総研の菊永氏から「物質の表面電位イメージング」、首都大東京の内田氏から「分子科学計算から探る! プラズマ-生体電荷相互作用モデルの構築」と題してご発表頂き、九州大大学院の白谷氏の総括と議論により、夜明け

を迎えた。もうひとつの専門委員会「プラズマ-タンパク質科学による未踏領域の開拓と基盤確立」からはシンポジウムS6にて「プラズマ理工学-タンパク質科学による未踏領域の開拓と基盤確立をめざして」が開催され、5件の発表[北野氏(阪大):「タンパク質の部分酸化による活性制御」、林氏(九大総理工,佐賀大医):「酸素プラズマ照射によるMAPKのリン酸化と細胞活性変化」、高木氏(岩手大):「電界印加による酵素活性制御」、飯島氏(東工大未来研,農研機構):「植物細胞へのタンパク質導入」、村上氏(成蹊大)による「プラズマにより摂動された細胞内代謝ネットワークのモデリング」]を行った。プラズマと生化学の共通未踏領域の開拓が着実に進展しているといえるシンポジウムであった。

核融合プラズマ領域

領域長 大野哲靖(名古屋大学)

3件のシンポジウム,1件のオーガナイズドセッション,10件の招待講演,一般講演(口頭発表,ポスター発表)が行われ,活発な議論が行われた。以下にシンポジウム,オーガナイズドセッション,ならびにセッションの概要(一部)について報告する。

シンポジウム「BAフェーズIの成果とBAフェーズII計画」

2007年に日欧協力で開始された幅広いアプローチ(BA)活動について,これまでの成果と将来計画について報告がなされた。東島氏(QST)の趣旨説明に続いて,文科省の新井戦略官より,政策検討状況,BAフェーズIの成果,BAフェーズIIの目標とBAフェーズIIに向けた調整状況が報告された。中島,フィリップ・カラ,鎌田各事業長より,IFERC事業,IFMIF/EVEDA事業,STP事業の進捗状況が報告された。特にサテライトトカマクJT-60SAの建設は最終段階に来ており,高瀬氏(東大)からもBAフェーズIIにおける先進プラズマ研究の進展への期待が示された。最後に寺井氏(東大)より,原型炉に向けた核融合炉工学への進展に対するBA活動の重要性が述べられた。(名大 大野哲靖)

シンポジウム「トロイダルプラズマにおける揺らぎの大域特性と分布形成」

トラス系プラズマはエネルギーの入出力と輸送がバランスすることで大域的な分布が決まる非平衡・開放系であり,その制約下で様々な時空間スケールの揺らぎが現出する。近年,分布と揺らぎのスケールを分離することなく,プラズマ全体を扱うシミュレーションや揺らぎの2・3次元計測を通して,輸送の大域的な特性が明らかになりつつある。本シンポジウムでは,T.Hahn氏による近年のレビューに続いて,大域シミュレーション(岸本・石澤)および実験・計測(居田・藤澤)の報告があり,活発な議論がなされた。特に,大域的なMHD揺らぎと微視的な乱流揺らぎが共存した系での輸送がシミュレーション(石澤)と実験(居田)の双方から議論されるとともに,乱流の全体像の解明を目指した新トカマク装置建設の状況(藤澤)も報告された。

(京大 岸本泰明)

シンポジウム「エネルギーリソースをめざしたレーザー核融合研究の進展と展開」

レーザー核融合研究における炉心プラズマの国内外の進展、レーザー技術進展により可能となった高繰り返しパワーレーザーによる炉工学の可能性、及びレーザー核融合炉実現に向けた技術課題が報告された。新たな試みとして、講演中、web入力形式(sugukiku.com)で内容に関する意見を募集した。結果、発電実証に対する一定の理解、磁場閉じ込め方式との共通課題の整理など14の質問・コメントが寄せられ、総合討論では、それを踏まえた要点を絞った議論が展開された。

(光産業創成大 森 芳孝)

オーガナイズドセッション(OS)「高専における放電プラズマ教育研究の拡がり」と展望」

昨年度に続いて2回目となる本OSは、高等専門学校(高専)で行われている放電プラズマに関する教育・研究の活動状況を幅広く紹介していただき、新たな高専教育・研究ネットワーク構築の契機となることをめざしている。招待講演では、北九州高専校長の原田氏より実践的なエンジニア育成におけるプラズマ支援教育の有用性が述べられた。その後3件の口頭発表が行われ、またポスターセッションでも活発な議論と交流がなされた。

(名大 大野哲靖)

セッション 30Ca07-30Ca11

小林達哉氏(核融合研)の招待講演に引き続き、4件の若手賞審査対象の口頭発表があった。核融合プラズマの輸送研究、及び供する電子密度、圧力分布計測に加え、非接触プラズマ放出現象、JT-60SA平衡制御の講演があり、活発な議論が成された。理論モデルに沿って、非局所的輸送で実験結果を説明する試みが成された招待講演が興味深かった。

(九大 出射 浩)

セッション 30Aa06-30Aa11

理論・シミュレーション、機械学習による研究動向のセッションであった。大域的最適化とニューラルネットワークの輸送ソルバーへの実装、スパースモデリングに基づく全状態探索による放射崩壊可能性予測研究が報告された。フォッカープランク衝突項の保存則を離散化レベルで成立させることが可能な数値スキームの開発、高エネルギー粒子駆動測地線音波振動モードによるバルクイオン加熱のMEGAコードによる系統的検討、GT5Dコードによる重イオン不純物輸送解析の妥当性の検討や、イオン温度勾配駆動乱流における水素同位体効果の加熱手法依存性の解明などが報告された。

(核融合研 横山雅之)

セッション 01Ca01-01Ca03

九大QUESTにおける高周波28GHzを用いた非誘導電流駆動実験が報告された。中性粒子の高速電子との衝突が鍵となるバルク電子・高速電子加熱の分岐(小島)、入射ビーム制御による高密度・電流放電、比較的バルク電子温度の高い(500eV)プラズマ生成に成功し、さらなる誘導加熱で800eVを達成した(出射)。また、慣性核融合に関して、高速点火核融合での炉レベルのターゲット設計の検討結果(長友)、レーザー2倍高調波レ

ザー照射により発生する高速電子の特性向上が期待されること、インプリントによる擾乱を抑制するためのダイヤモンドコーティング開発の成果(岩崎)、および対向レーザー照射による高速点火ターゲット実験で燃料の高効率加熱ができたこと(北川)、が報告された。

(阪大 白神宏之)

核融合炉工学領域

領域長 小西哲之(京都大学)

一般講演、招待講演7件、シンポジウム3件(1件は核融合プラズマと合同)があった。すべてのセッションを聴講したわけではなく、重要な講演を網羅しているわけでもないが、プログラム編成、現場での議論等で、いくつか気が付いた内から報告したい。

核融合プラズマと合同のシンポジウム「BAフェーズIの成果とBAフェーズII計画」は、今年度でフェーズIが終了し、新たなフェーズにはいる日欧協力について、総合討論含め8件で構成され、新井戦略官による国としての方針、サテライトトカマク(JT60SA)、IFMIF-EVEDA、IFERCの各プロジェクトの総括、プラズマ及び炉工学からのコメントが報告された。BAは、原型炉志向の国際協力事業であり、ITER移行を見据えたときに世界の核融合研究の中でも特筆すべき地位にあって、学術的展望とともに核融合エネルギー実用化に向けて重要な意義を持つことが共通に認識された。

シンポジウム「大型核融合実験装置におけるPWI研究の進展」は、富山大波多野氏が中心となって構成され、JETのITER like wallサンプルのBAによる分析4件、LHDにおけるPWI研究を含めた7件の講演・討論で構成された。JET-ILW実験はそれ自体が独創的な研究であるが、今後の核融合の成否を握るPWI、特にトリチウム挙動について貴重な知見を提供した。

「原型炉におけるトリチウム諸課題の解決へ向けた取組」シンポジウムは、原型炉の安全性、トリチウム入手、環境影響及び許認可など様々な視点からの報告で構成された。トリチウムに関しては、工学のみならず、社会的受容性や資源戦略など、核融合の成立性に決定的な重要性を持ち、幅広い議論と経験が必要である一方、その取り組みには施設、人員、社会的組織的な対応など多くの点で問題があることが指摘された。分野を超えた取り組みが原型炉設計を軸に組織されつつあり、今後の展開が期待されるが、困難の多くが摘出されたことも特筆できるであろう。

招待講演は、トカマク原型炉、ヘリカル炉、JT60SA、ITERジャイロトロン、原型炉燃料系、LHD重水素実験、タングステン材料など、広い範囲からのトピックを網羅するものとなった。核融合炉工学の分野はITER用の機器開発が一段落し、原型炉を見据えた新たなフェーズに入っており、研究テーマも基礎的・萌芽的なものから核融合炉志向まで様々な性格を持っており、一概に括することも難しく、議論も時としてすれ違う場面も見られたが、どのセッションも意見交換は活発で、また若手の活躍も目立った。プラズマやほか領域との交流、特に放射線や

トリチウムの問題についての議論を広げることが本学会における工学領域の今後の重要課題と認識された。

■第36回年会 ポストデッドライン講演

ポストデッドライン講演として以下の9件を採択しました。

36PD-01

ITER水平ランチャーによる光線追跡および吸収計算
○矢嶋 悟, 梶原 健, 磯崎正美, 小林則幸, 三塚 駿, 池田亮介, 小林貴之, 高橋幸司 (量研機構)

36PD-02

Current Sheet Structure in Anti-Parallel Driven Magnetic Reconnection
○陳 秋榮^{1,2)}, 井上静雄³⁾, 小野 靖¹⁾, 田辺博士¹⁾, 堀内利得⁴⁾ (¹⁾東大, ²⁾PPPL, ³⁾QST, ⁴⁾NIFS)

36PD-03

湿潤空気プラズマ反応における中枢ネットワークの抽出
○井上紗都, 村上朝之 (成蹊大)

36PD-04

低温大気圧プラズマジェットの反応性流体シミュレーション
○新井慎平, 岡本悠也, 川口 悟, 村上朝之 (成蹊大)

36PD-05

200 MHz 逆F共振アンテナICP装置開発
○小口治久 (産総研)

36PD-07

一次元イオン流速ベクトル分布計測のための4方向受光型ドップラー分光プローブアレイの開発
○染谷 諒, 小野 靖, 田辺博士 (東大)

36PD-08

磁場とイオン温度の高精細二次元計測を用いた電流シート中のプラズモイド生成の実験的検証
○秋光 萌, 田中遥暁, 三木景介, 田辺博士, 小野 靖 (東大)

36PD-09

X線分布計測のためのステップ型コリメータの提案
○渡邊 理, 江尻 晶, 辻井直人, 山崎 響 (東大)

36PD-10

2次元MHDシミュレーションを用いた球状トカマク合体立ち上げ法のリコネクション加熱の最適化
○Borade Anup Arun, Yasushi Ono, Shizuo Inoue (Tokyo Univ.)

学会賞候補者の募集について

第28回『論文賞』, 第25回『技術進歩賞』, 第25回『学術奨励賞』, 第19回『産業技術賞』, 第14回『貢献賞』, 第3回『紅宝賞』の募集を開始いたします。募集についての詳しい内容は学会Web (<http://www.jspf.or.jp/award/youkou.html>) にアップしておりますので、ぜひごらんください。なお、2020年度『若手学会発表賞』の募集に関するお知らせは、後ほどいたします。

募集期限：2020年6月1日(月) 学会事務局必着

第 36 回年会 若手学会発表賞 選考結果の報告

一般社団法人 プラズマ・核融合学会
推薦(学会賞)委員会委員長 豊田浩孝

中部大学春日井キャンパスで開催されたプラズマ・核融合学会第 36 回年会における優秀発表者への若手学会発表賞(協賛: 未来エネルギー研究協会)を下記のとおり選出いたしました。なお、本年より本賞は申請者に研究概要をまとめた申請書類を提出いただくとともに、審査は正会員と学生会員の2部門に分けて実施しております。124 件(口頭発表 39 件, ポスター発表 85 件)の応募に対して、合計 116 人の会場審査員に審査をお願いし、その採点に基づいて推薦(学会賞)委員会において審議・決定いたしました。受賞者の皆様、おめでとうございます。また、熱心に審査にあたっていただいた会場審査員の皆様、および事前準備と審査結果の集計にご尽力いただいた、年会運営委員会委員、事務局の皆様、事務局長に厚くお礼申し上げます。表彰式は、2019 年 12 月 2 日の第 36 回年会クロージングの前に執り行いましたので、併せてご報告いたします。

■受賞者

【正会員部門】

29Bp04 (口頭) [基礎]

田辺博士 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)
題目: 「超解像イオンドップラートモグラフィを用いた高磁場合体・磁気リコネクションのイオン加熱・輸送過程の研究」

30Aa08 (口頭) [核融合プラズマ]

白戸高志 (量子科学技術研究開発機構)
題目: 「関数解析に基づく Rosenbluth スキーム」

01Cp03 (口頭) [核融合プラズマ]

齋藤誠紀 (山形大学)
題目: 「分子動力学法による炭素壁水素リサイクリングモデルの開発」

29P64 (ポスター) [核融合炉工学]

権 暁星 (量子科学技術研究開発機構)
題目: 「ITER テストブランケットモジュールシールドの設計検討」

【学生会員部門】

01Aa04 (口頭) [基礎]

森下侑哉 (京都大学大学院工学研究科)
題目: 「データ同化を用いた LHD プラズマの統合輸送シミュレーション」

30P14 (ポスター) [基礎]

皆川裕貴 (日本大学生産工学研究科)
題目: 「光渦吸収分光における回折の影響とスペクトル形状の評価」

30Aa04 (口頭) [応用]

野中 侃 (九州大学大学院工学府化学システム工学専攻)
題目: 「高周波熱プラズマにおける高融点金属系リチウム複合酸化物ナノ粒子の生成機構」

30Aa07 (口頭) [核融合プラズマ]

横山達也 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)
題目: 「LHD における放射崩壊のデータ駆動型アプローチによる特徴抽出と密度限界モデルの構築」

01P45 (ポスター) [核融合プラズマ]

舟橋良哉 (名古屋大学)
題目: 「トカマク型原型炉における完全非誘導電流駆動のための中性粒子ビーム入射条件の検討」

30P41 (ポスター) [核融合プラズマ]

石田祐太郎 (京都大学大学院)
題目: 「反転磁気シアトカマクにおける運動論的 MHD 不安定性の非線形飽和機構」

01P61 (ポスター) [核融合プラズマ]

木股空良 (名古屋大学)
題目: 「高分散高時間分解分光器を用いた TOKASTAR-2 トカマクプラズマのイオン温度計測」

29Dp07 (口頭) [核融合炉工学]

濱名優輝 (北海道大学)
題目: 「誘導結合プラズマと相互作用する液体金属からの液滴放出現象」

01P84 (ポスター) [核融合炉工学]

吉村暢也 (九州大学大学院工学府)
題目: 「原型炉起動時におけるトリチウムバランスの検討」



若手学会発表賞のための推薦(学会賞)委員会
委員長: 豊田浩孝
委員: 大野哲靖, 荒巻光利, 小西哲之
会場審査員: 116 人